中古の文学作品からみた山里の基本的イメージとその美について

文学作品からみた我国の山居観—その 1

正 会 員 小 野 恭 平*

1. 序

早くから都市文明の開けた中国では、都市の発達と共に、都市を離れ、山野に遁走し、自適の生活を送ろうとする居住様式が存在した。これを山居と言い、古来、隠逸・隠者の理想的な住み処・住まい方とされてきた。しかも、その自由で囚われのない生活、粗末ではあるが簡素で素朴な住居、清らかな山河等は、都市の文人・貴族達にとっても憧れのまとであり、文学・絵画の格好のモチーフとされるだけでなく、実際にも、山水豊かな景勝地に山荘を営み、隠逸風の生活が模倣され、楽しまれてきた¹⁾。官を辞し、俗塵を逃れ、自適の生活を送ることは、中国の文人・貴族達にとっては、理想的な生き方であると同時に、最も風雅で最も魅力的な趣味の様式でもあったのである。

ところで、このような生き方あるいは趣味は、我国にも早くから伝えられ、懐風藻には既にそうした山居の気味を詠んだ詩が多く残されている²⁾。また絵画においても、麻布山水図のように、巨岩を配した仙境に、隠者とおぼしき人物とその草庵、反橋を渡る客人と釣糸を垂れる人物など、仙境での閑適の様を描いたと思われる作品が残されている。そして以後は我国においても、魅力的な居住様式として、様々な文学・絵画に描かれ、実際にも多くの山荘や草庵が営まれていく。長屋王の「茅葺き、黒木造り」³⁾の「山家、山園の宅」⁴⁾は、そうした上代における山居の最も代表的な例であろう。

さて本研究は、こうした山居が我国においては歴史的にどのような思想あるいは興味ある住み処とされてきたかについて、当時の文学作品や絵画などを資料としながら考察しようとしたもので、そのうち本稿は、平安時代の貴族の山荘が営まれた山里をとりあげ、それがどのような場所としてイメージされていたか⁵⁾、特にその基本的なイメージと美について明らかにしようとしたものである⁶⁾。即ち、平安時代においては、純粋な都市貴族の発生という時代背景のもとに⁷⁾、山荘経営が一つの流行のようになり、京近郊の景勝地に極めて多くの山荘が営まれたが、なかでも、その山荘の営まれた閑寂な場所、

即ち山里の興味が注目されるようになり、歌に詠まれ、物語の舞台とされ、「ひとへに山里などのやうにおもしろうせんと思はは……」(作庭記)とあるように、「おもしろき」庭園の意匠ともされて、王朝人の好尚にかなう独自の美的世界となっていたのであるが、本稿(及び次稿)はこの山里の美あるいは興趣を明らかにしようとしたものである。

なお、上代の山居や中世以降の山居については稿を改めて考察する予定であるが、以下では本研究の位置づけと展望のために、平安時代から中世後期に至る山居の歴史について若干の概観をしておくことにする。

まず、平安時代の山居においては、上でも述べたように、山里という場所が特に注目されていたのであるが、その山里には貴族の山荘の他に遁世の聖達の草庵があった。が、これらはこの時代にはまだ修道専一の場所であって、歌の題材になることは稀で、風雅の場所とはなっていなかった。しかし中世になると、西行・長明のような所謂「数寄の遁世者」⁸⁾の草庵が結ばれるようになり、前代の王朝的な山里の美的世界に中世的な無常観の入った深い精神性・宗教性を帯びた風雅の世界が開けていく。ところが中世も後半になると、さらに新しい局面が展開するようになる。即ち、かつては人里離れた山里に結ばれていた草庵が、都市の中に営まれるようになる⁹⁾。それは言わば、市中に営まれた山居とも言うべきもので、山居の趣を象徴的に再現したものであったろう¹⁰⁾。が、しかし、ひとたび草庵が市中に営まれるようになると、俗化がはじまり、前代のような修行の場所としての性格は薄れ、しだいに遊興性のまざった文芸・遊宴の場所となり、連歌や雑談の場所となってゆく¹¹⁾。そして、やがてはそこに茶の湯が入り、「市中の山居」¹²⁾と呼ばれるような草庵風の茶室が形成されるのである¹³⁾。つまり我国の山居は中世後期に至り「市中の山居」という逆説的な山居を生み出し、それがさらに草庵風茶室をも生み出したのであるが、本研究で扱う時代はこの草庵風茶室が形成される直前までの時代である。従って、本研究の主目的は、あくまでその間の山居の思想や興趣を明らかにすることであるが、そのことは他方で草庵風茶室の思想や美意識の源流を明らかにすることにもなるであろう。

* 北海学園大学 助教授・工修
(昭和 62 年 12 月 21 日原稿受理)

それ故、草庵風茶室の歴史を考察することが本研究の主たる目的ではないが、各時代の山居の特徴を側面から位置づけるためにも、以下では適宜、草庵風茶室の思想・美意識等との関連についても言及しておきたいと思う。

なお本稿では、専ら文学作品のみを資料としているが、それはイメージや美という観念や内面的心境といったものは、正史や記録の類より、むしろ文芸という虚構の世界においてこそ、より直截に表現されているように思われるからである。また資料とした文学作品は、和歌については「新編・国歌大観」(角川書店)¹⁴⁾の古今集から詞華集までの勅撰集と「私家集大成」(明治書院)¹⁵⁾の中古Ⅰ及び中古Ⅱに採録された私家集を用い、物語作品その他の類については、原則として岩波古典文学大系本を用い、これにない場合はその都度注記によって底本を示した。また、これらの資料からの引用文については、適宜句読点・濁点を施し、仮名を漢字に改めた。

2. 山里の地理・地形的イメージ

山里(やまと)とは、語義的には、「山中の人里、山間の村里」を意味するが¹⁶⁾、「やま」とは必ずしも地形としての「山」のみでなく、「野・里に対して人の住まない所」の意味でもあり¹⁷⁾、また中古における山里の用例を見ると、「田舎」や「地方」が山里と呼ばれたりもしているところから¹⁸⁾、要するに、「人気の少ない辺鄙な場所」というのが、その最も広義な地理的イメージだったように思われる。ただ、中古の文学作品に登場する山里は、殆どの場合、東山・西山・北山・嵯峨・桂、あるいは少し遠い場合でも石山・宇治・住吉・須磨などで、「山里」と言えば、狭義には、これら京近郊の地がイメージされていたものと思われる。従って、これらは辺鄙な場所とは言っても、辺境の地というわけではないし、むしろ京から程遠くない景勝の地で、社寺詣等でも比較的良好に知られた場所であったろう。従って、適度な人気もあったと思うが、閑寂な場所ではあったようで、例えば早くから開発されたと思われる東山でも、「人しげきやうに待れど、いとかがこに待り」(源氏物語・夕顔)のように描写されており、ひっそりとした、人里離れた趣をもった場所であったことがわかる。つまり中古の文学作品に登場する山里の地理的イメージは「京から程遠くない景勝の地で、適度な人気があり、しかし、人里離れた閑寂な趣のある場所」というのがその一般的なイメージだったように思われる。

次に、このような山里の地形的イメージであるが、先ず注目されるのは、山麓とか山裾のような山の辺の地形がイメージされたものが多いという点である。例えば作庭記にも「ひとへに山里などのやうに、おもしろうせんとおもはは、たかき山を屋ちかくまうけて、その山のいたたきよりすそさまへ、石をせうせうたてくたして、このいゑをつくらむと、山の片そわをくつし、地をひきけるあひた、おのつからほりあ

らはされたりける石の、そこふかきとこなめにて、ほりのくへくもなく、そのうゑもしは石のかたかとなんとに、つかはしらをも、きりかけたるていにすへきなり。」¹⁹⁾とあるように、屋を建てる場合でも、その一部を山に片懸け、ちょうど山懐に抱かれたような格好になる地形、即ち山が真近くに迫る山麓とか山裾の地形が山里らしい地形としてイメージされていた。このことは、物語に描写された山里の山荘が「山に片懸けて」とか「峰に片懸けて」と表現されることが多いことから推察されるであろう²⁰⁾。そして、このような山続きの地形の故に、そこは深い木立ちに覆れ、蟬しぐれや松風の響きが木深く聞こえ、鹿の鳴く音が遙かに聞こえてくるような情趣深い場所となっていたのである²¹⁾。

一方そこには、必ずと言ってよいほど、山から流れ落ちる滝・溪流などが配され、水に臨む地形になっていた²²⁾。伊勢物語(78段)に、人康親王の山科山荘が「滝おとし、水走らせなどして、おもしろく作られ」た庭をもち、紀伊の浜の石が献上されたことが誌されているが、先の作庭記の記述などを考え合わせると、山の傾斜を利用して、岩伝いに水を落とす、というような庭園の意匠だったのであろう。

また山里は眺望にすぐれていることも重要な特徴の一つであった。眺望が良いのは、山里が山麓・山裾のような傾斜した地形にあったからであろうが、多くの山荘が谷や野を望む眺望のきく場所に建てられていた²³⁾。当時の人々にそうした眺望への好みがあったからであろうが、そのことは例えば作庭記の著者俊綱が眺望の有無をもって勝地定めをしたとか(今鏡)²⁴⁾、源氏物語・北山の段で、源氏が京の方を望見しながら「絵にいとよくも似たるかな。かゝる所に住む人、心に思ひ残すことはあらじかし」(若紫)と述べたり、供人に「これ(北山からの眺望)はいと浅く侍り。(中略)明石の浦こそ、なほ殊に侍れ。なにのいたり深き隈はなけれど、たゞ、海の面を見渡したるほどなむ、あやしく、こと所に似ず、ゆほびかなる所に侍る。」(若紫)などと語らせているところからも推察されるであろう。その広々として、ゆったりした解放的な感じが愛されたのであろう²⁵⁾。

さて以上指摘したように、中古の文学作品からみた山里の地理・地形的イメージとしては、一般に、京近郊の景勝地にあり、山懐にいだかれて、深い木立ちに覆われ、水の流れに臨み、前には広々とした風景が広がる、というのが典型的なイメージだったようで、山荘が営まれる場所としてどのような場所が理想的であったかがわかる²⁶⁾。では、このような山里を当時の王朝人達はどのような印象をもって見ていたのであろうか、以下ではこのことについて考えてみたい。

3. 山里の基本的イメージ

3-1 山里の寂しさ

山里（やまさと）という言葉が最初に文献に見えるのは、おそらく藤原関雄²⁷⁾（803～853）の「宮づかへひさしうつかうまつらで山里にこもり侍りけるに詠める——奥山の岩垣紅葉散りぬべし照る日の光見る時なくて」（古今集，282）か「山里に住みにし日より訪う人も今はあらしの山ぞ花びしき」（古今和歌六帖）の歌であろうが²⁸⁾，これらの歌には既に山里が或る種の情調を帯びた場所として詠まれている。それは古今集の「山里を詠んだ歌」（歌中に山里の語が詠みこまれた歌，以下同じ）7首²⁹⁾にも同様に認められる傾向で，しかもそれは中古全体を通じて認められるのである。実際，古今集から詞華集までの勅撰集の中で，山里を詠んだ歌60首をみると，やはり山里を寂寥・孤独な場所として詠んだものが最も多い³⁰⁾。そこで今試みに，それがどの程度の割合で詠まれていたかを見るために，この60首のうち「住む人もなき山里」とか「見る人もなき山里」のように「山里」を直接形容する修飾句を有する歌（23首）の修飾句を見ると，やはり最も多く見られるのが「訪う人もなき山里」とか「人めまれなる山里」のように，「孤独な場所としての山里」という類型を詠んだもので（9件）³¹⁾，次いで「雪消えぬ山里」とか「花もにははぬ山里」のように，雪に閉ざされた春の訪れの遅い場所であることを述べたもの（5件）³²⁾，「霞にまがふ山里」とか「霞こめたる山里」のように，霞に閉ざされた（人里から隔離された）場所であることを述べたもの（2件）³³⁾，「ひぐらしのなく山里」とか「ものおもひまさる山里」のように，徒然で物思ひのまさる場所であることを述べたもの（2件）³⁴⁾という順序で（計18件，全体の約77%），これらの類型からみても，「人里から隔離された人恋しい寂寥の地」というのが，王朝人の山里に対する最も基本的な（しかも極初期から一貫して見られる）イメージだったことがわかるのである。

なおこのようなイメージは，山里の風景や四季のイメージを通して象徴的に詠まれており，以下ではそれらを通してもう少し詳しく見ておくことにする。

3-2 山里の四季と風景のイメージ

ここでは，山里の四季と風景のイメージが，中古の和歌においては，どのように詠まれているかを見てみることにする。資料としては古今集から詞華集までの勅撰集と中古の私家集（「私家集大成」の中古Ⅰ及び中古Ⅱ）に集録された歌のうち，「山里を詠んだ歌（歌中に山里の語が詠みこまれた歌）」424首の歌を用いた。

・まず山里の春のイメージであるが，それはひたすら待たれる季節として詠まれている³⁵⁾。春が待たれるのは，人目ともししい山里でも，花のたよりに訪う人があったからである³⁶⁾。しかし山里の花は遅く，霞に閉じられたまま徒然な日々の続くことが多い³⁷⁾。しかも山里では，やっとなついた花も，見る人もなく虚しく散るばかりで³⁸⁾，花が散れば再び人も来ず，目を楽しませるものの何もない

寂寥たる世界に帰ってゆくのである³⁹⁾。

・夏の山里は比較的寂しさの印象に乏しく，卯の花・郭公等の興趣ある景物が詠まれることが多い⁴⁰⁾。しかし，山里の夏もまた，郭公の声が「待たれる」季節であったことは周知のとおりであるし⁴¹⁾，鳴けば鳴いたで「郭公初声聞けば山里に常よりことに人ぞ待たる」（道済集，道済）季節だったのである。

・秋の山里は専ら物思ひのまさる季節，凋落的な季節として詠まれている⁴²⁾。しかし紅葉や菊の美しい季節でもあり，たまさかそれを見に来る人はあった⁴³⁾。しかし，やはりここでも，嵐のみ吹き，霧の深い山里を訪う人はなく⁴⁴⁾，鹿や月のみを友とする「わりなき」世界であった⁴⁵⁾。しかも山里の秋は去るのも早く，すぐに時雨が降り，雪の降る季節となってゆく⁴⁶⁾。

・冬は山里の四季の中では最も寂しく，荒寥とした季節としてイメージされている⁴⁷⁾。しかし例によって，たまさか狩のたよりに訪う人はあった⁴⁸⁾。が，それも一時のことで，やがては音もない，雪に閉ざされた雪中籠居の生活となり⁴⁹⁾，再び雪の中で遅い春がひたすら待たれるのである⁵⁰⁾。

さて，こう見てくると，山里は，どの季節においても人が待たれ，人恋しさにみたされた世界としてイメージされているのであるが，それはその風景についても同様であった。

山里の風景が当時どのようにイメージされていたかについては，当時の障壁画・扇面画等が残されていれば参考になるが，現存する資料に乏しく，以下では歌に詠みこまれた山里の景物からその風景のイメージを再現してみることとする。資料としては先に挙げた山里の歌（424首）を用い，ここから主要な景物を抽出した。結果は次のようである（なお各景物は便宜上4類に分け，表中の数字はその景物の出現度数を示す。またここに挙げた景物は各類で3度以上出現するものだけを挙げ，その他の景物については種類・出現度数共に少なく，ここでは割愛した）。

- ・植物—花(49, 主として桜花), 紅葉(38, うち木の葉9), 卯花(26), 梅(15), むら草(9), 葛の葉(8), 芒・荻(4), 菊(4), ならの葉(3)
- ・動物—鶯(23), 郭公(22), 鹿(18), 虫(4), 蛸(3)
- ・天象—雪(49), 月(28), 風(17), 嵐(12), 時雨(11), 霞(11), 霧(8), 雲(8), 煙(6), 雨(6), 霰(5), 秋の夕暮(3)
- ・住居, 地理, 風俗等に関するもの
 - 山路(17), 垣根(14, 大部分が卯の花垣である。), 稲田の風物(7), 荒れたやど(6), 庭(6), 笥の水・氷(4), 柴の戸(3), 鐘の音(3)

さて，これらを見ると，山里の風景を構成する景物は意外とその種類が少なく，従って，そこでイメージされ

ていた風景も、かなり類型的な風景であったことがわかる。そこで以下では、これらの景物を用いて、その大凡の風景を再現してみることとする。風景の構図としては、先に2節で指摘したような地形が骨格となり、そこに山路が通じ、山荘が建っている、というのが基本で、そこに次のような風景が配されていたものと思われる。

• 例えば秋は、「葛の葉の這いかかる山荘に紅葉が散り、庭は荒れるにまかせてむら草ばかりが生い茂り、虫の鳴く音も弱々しく秋の終りを告げている。柴の戸は閉じたまま人気もなく、訪なうものは峯の嵐、松吹く風、木の葉の舞う音、笈の水の音ばかりである。垣根の外の稲田では、時雨ばかりが過ぎがてにし、妻呼ぶ牡鹿が秋霧の中にたたずみ、芒はむなしく人を招いている。遠くでは夕暮を告げる鐘の音が寂しく聞こえ、月のみ澄んで山の端にかかっている…」というような風景。

• 冬は「野も山も白一色の雪に閉ざされて、笈の水も氷して音さえもなく、空には柴たく煙が一筋細く侘びしげに立ちのぼっている…」というような風景。

• 春はタイプの異なる風景が幾つか再現できる。例えば「梅の花が咲き、鶯が鳴き、その風流を愛でる人がいる」というような風景。あるいは「深い霞に閉じられて来る人もなく、徒然に外をながめやる人がいる」というような風景。あるいは「見る人もない桜が虚しく空に散っている」というような風景になろうか。

• 夏は「山路も庭も青々としたむら草が生い茂り、雨と雲とに閉じられて訪う人もなく、うっとおしく徒然な風景に囲われている。が、卯の花だけは、その憂うつを晴らすかのように一際白く咲きこめて、山荘の内では待てども鳴かぬ郭公を心待ちにする人がいる」というような風景になろう⁵¹⁾。

さて、これらの（主として山里の自然の）風景を見ると、その殆ど全てが寂しさを可視的にしたような風景で、山里はその風景においても寂しさにみだされた世界であることがわかるのであるが、一方、そこでの生活に関する風景については、「荒れたやど」が特徴的に見える点が注目される。「荒れたやど」は一般に、中古の文学作品においては、男の訪れの絶えた女の家を暗示したが、ここでもそれによって、女性がひとり孤独な侘び住まいをしているという寂しい生活が暗示されていたのである⁵²⁾。ちなみに、山里で「そこに住むべきにもあらぬ」⁵³⁾貴人あるいは佳人が、物思いに沈みながら「ながめたる」生活を送っているという風景は、当時の物語や倭絵においては非常に好まれたモチーフだったようで、多くの作品に一つの類型のように登場する⁵⁴⁾。

• ほのかに、たゞ「小さき島の浮べる」と見やらのも心ぼそげなるに、雁の連ねてなくこゑ、梶の音にまがへるを、うちながめ給ひて、涙のこぼるゝをかきはらひ給へる……（源氏物語、須磨）

• 雪かき暗し、降り積るあした、来し方、行く末のこと、残らず思ひ続けて（中略）、汀の氷など見やりて、白き衣どものなよ

かなる、あまた着て、ながめゑたる（同上、薄雲）

• 小野には、いと、深く繁りたる青葉の山に向ひて、紛るゝことなく、遺水の螢ばかりを、昔おぼゆる慰めにて、ながめ居給へるに……（同上、夢浮橋）

• 屏風の絵に、花咲きたる山里のかすかなるに、女たゞひとりあり一見る人もなき山里の花の色はなかなか風ぞおしむべならね（道信集、道信）

• 屏風絵に雪降りたる所に女のながめしたる所を詠める一春や来る人や来るともまたれけりけさ山里の雪をながめて（後拾遺集、410、赤染衛門）

• 大殿の歌絵に、山里とおぼしき屋のつまに女一人ながめてゐたる所に、幼き子伏したり、そのかたはらに女の着る裳といふものをゝきたり、前に田のあるに鴨をいふ鳥ひとつゐたり（後略）一君待つとたまもの床におき伏していくたびかものうきねしつらん（散木奇歌集、俊頼）

さて、こう見てくると、山里は、その自然の風景と共にそこでの生活の風景もまた寂しさが可視的にされたような風景だったわけで、山里があらゆる面で寂しさの凝縮されたような世界としてイメージされていたことがわかるのであるが、ではなぜ、山里はかくも寂しく孤独な場所としてイメージされていたのであろうか。

4. 山里の寂寥とその美について

山里が「寂しき場所」とされるのは、例えば文学史的には、自然を寂しきものとする漢文学の影響や⁵⁵⁾、おそらく初めて山里の寂しさを詠んだ藤原関雄の歌などが、その後の山里のイメージを規定した、ということもあったであろう。また和歌における（特に贈答歌における）修辞上の問題として、「わぶ」ことが恋の最高の意志表示であったように⁵⁶⁾、寂しさを訴えることによって相手に対する友情・思慕の気持ちをより効果的に伝えようとした、ということもあったであろう。

また、山里が（それは原則的に洛外にあったが）宮廷を中心とする狭い貴族社会を殆ど唯一の生活圏としていた王朝貴族にとっては、京から、そして社会からも遠く隔絶された孤独な場所としてイメージされていた、ということもあったであろう。実際山里は、京からさ程遠くない場所であっても、実際以上に遠い場所のようにイメージされていたし⁵⁷⁾、流罪が死罪に次ぐ重い刑罰であったこの時代においては、そうした洛外の山里に身を置くこと自体が流罪にも似た孤独な境遇に身を置くことを意味したのではないかと思う。ちなみに、中古において山里は、惟喬親王（洛北小野に隠棲）や源高明（山科葛野に隠棲）、兼明親王（嵯峨龜山に隠棲）の例のように、世にいれられぬ者、政治的敗者など、社会から疎外された不遇の者の住み処となっていて、そのような例は物語においても、世にあり侘びて東山に入った業平の例（伊勢物語 59 段）を初めとして、須磨に退居した源氏の例（この地はまた、かつて行平中納言が侘び住まいをした場所

でもあった),あるいは「世に数まへられぬ」(橘姫)敗
 浅の身を宇治に隠した八宮の例などにも見られるところ
 である。また山里には女性が隠れる場合もあったが、こ
 の場合もやはり、蜻蛉日記の作者が西山に隠れたように、
 結婚生活や恋の不如意にある者が世(男女の仲)を避け
 身を隠す場所となっていたのである⁵⁸⁾。

また山里は、後世のためとか病のため、あるいは老境
 に入ったために京を棄て、家族を離れ、ひたすら死と向
 かい合う場所でもあった。そこには、孤独者としての痛
 切な寂しさがあつたはずで⁶⁰⁾、そのような寂しもまた山
 里を寂しき場所とする要因としてあつたであろう⁶¹⁾。

さて、山里が寂しき場所とされる背景には、このよう
 に、山里が王朝人にとっての二大関心事とも言える栄華
 と恋のいづれからも疎外され、家族やそして社会からも
 隔離された「孤独者の住み処」であつたということが大
 きな要因としてあつたように思われる。が、しかし、山
 里が寂しとされるのは、必ずしも上に述べたような理由
 だけによるものではなかった。それだけでは山里は単に
 孤独で悲歎的な場所ではないのであつて、それが多くの
 の歌に詠まれ、絵に描かれた背景には、もっと積極的な
 理由もあつたはずで、少なくとも、高度に洗練された美
 意識をもった王朝人にとって、美的でないものが歌に詠
 まれ、絵に描かれることはなかったであろうから、寂し
 き山里にもやはり何らかの美があり、寂しさそのものにも
 何らかの積極的な意味があつたように思われるのである。
 ではそれはどのような美であり意味であつたか。

寂しき山里に何等かの美があるとすれば、先ずその自
 然美があげられよう。しかし山里の自然美は、中古の文
 学作品にあつては、多くの場合、自然美そのものが讃美
 されていたわけではなく、ある構図の中で、独自の情調
 を帯びた美として見られていた。即ち、次の例などはそ
 の典型的な例であろうが、山里の自然美は山里全体を覆
 う寂寥の中に配置されることによって、寂しさの情調を
 帯びた美、物悲しさの纏綿とするような美として見られ
 ていたのである。

・九月十余日、野山の気色はふかく見知らぬ人だに、ただにや
 はおぼゆる。山風に堪へぬ木々のこずゑも、峯の葛葉も、心あ
 はたさうあらそひ散るまぎれに(中略)鹿はただ籬のもとに
 たゞみつゝ、山田の引板にもおどろかず、色濃き稲どもの中
 にまじりてうち鳴くも、うれへ顔なり。龍の聲は、いとゞ物思
 う人を驚かしがほに、耳かしがましようゝろき響く。草むらの
 虫のみぞ、より所なげに鳴き弱りて、枯れたる草の下より龍膽の、
 われひとりのみ心長う這ひ出でつゝ、露けく見ゆるなど、みな、
 例の、この頃のことなれど、折から、所がらにや、いと堪へが
 たきほどの物悲しさなり。(源氏物語、夕霧)

実際、「寂しさにあはれもいとゞまさりけりひとりぞ月は見
 るべかりける」(千載集、993、顕照法師)ともあるように、
 美は寂しさの中に置かれることによって、しみじみとし

た、どうかすると涙を催すようなあはれ深い美として見
 えてくる。「罪なくして配所の月を見ばや」⁶²⁾という美意識
 も、配所という寂しさの極まる世界にあってこそ、月の
 光も一層痛切なあはれ深さを増して見えてくるという美
 の在り方を言ったものであろう。つまり山里の美は、月
 や花といった自然美が寂しさの纏綿とする風情の中に置
 かれることによって成立していた美であつて、中古の歌
 や物語において山里の寂しさが繰返し類型のように言
 われるのも、その寂しさがそうした美を成立させるため
 に不可欠な要素だったからではないかと思う。つまり王
 朝人はそうした美を成立させ、享受するために、敢て寂
 しさを求め、寂しさの中に身を委ねた、とも言えるので
 はないかと思う。

これらのことは、先に紹介した「山里でながめたる貴
 人」を描いた風景からも窺える。山里で寂しく人を待つ
 という情景は、寂しく悲劇的な情景である。しかし、こ
 れらは多くの場合、邸内を飾る障屏画として描かれたも
 ので⁶³⁾、一見悲劇的に見える情景でも、鑑賞する側とし
 ては必ずしも悲劇的な情景としては見ていなかったの
 ではないか。実際、こうした情景は賀の屏風にも描かれて
 いたようで⁶⁴⁾、むしろ美しい情景として見られていたよ
 うに思われる。即ち、女性がひとりながめたる情景は寂
 しい情景ではあるが、寂しいが故に、そこに「ながめた
 る佳人または貴人」という美が配置されることによって
 「寂しさの中に置かれた美」として、王朝人の好尚にか
 なう独自の美的風景になっていたように思われる。実際、
 このような情景が当時いかに美しい情景として見られて
 いたかについては、例えば更級日記の作者の次のような
 述懐からも知れるであろう。

・浮舟の女君のやうに、山里に隠し据えられて、花・紅葉・月・
 雪をながめて、いと心細げにて、めでたからむ御文どもを時々
 まち見などこそせめ、とばかり思ひ続け、あらまし事にもおぼ
 へけり。(更級日記)

これは山里に隠れ住む浮舟の悲劇的な境涯への共感と憧
 れを述べたものであるが、それはそのまま倭絵の情景で
 あり、このような寂しく心細い情景がいかに美しい風景
 として思い描かれていたかを示すものであろう。つまり
 ここでも山里の寂しさは否定的な要素ではなく、敢て求
 められていたのであり、寂しいが故に山里は、あはれ深
 い美的な世界となっていたのである。

5. 結

以上、中古における山里の基本的なイメージと美に
 ついて、寂しさが極めて重要な要素であつたことを指摘
 したが、ここで注意したいのは、その美が実は寂しさそ
 のものに見出された美ではなく、あくまで王朝的な美、
 即ち花鳥風月的な自然美や貴人・佳人などの美(優雅で
 貴びやかな美)がそこに配置されなければ成立し得ない
 美であつたということである。即ち、山里の美は、王朝

的な華やかな美・絢爛たる雅びの美とはうらはらな、寂しさを基調にした、やや中世的な趣きを持った美ではあったが、山里の寂しさそのものに見出された美ではなく、寂しさと、その寂しさの中に配置された「はかなげな貴人や佳人」、花・紅葉・雪・月・鶯や郭公といった伝統的な花鳥風月がつくりだす嫋々たる情緒の中に見出された美であったということである。実際、先にも述べたように、山里の「ながめたる情景」が美的な風景になり得ていたのも、それが山賤・田夫のそれではなく、あくまで都の貴びたる貴人・佳人のそれであったからで、彼等が不遇な運命のもとに、寂しく辺鄙な場所で苦しみ、耐えているからこそ、あはれでもあり、美しい風景ともなっていたのである。山里の寂しさそのものに美が見出されるようになるのは、おそらく中世になってからで⁶⁵⁾、中古においてはあくまで、花鳥風月や貴人・佳人のような優美・優麗な要素が不可欠で、それらが寂しさの中に配置されることによって初めて独自の美的世界となっていたのである。山里が、寂しいけれど、どこか優美なイメージが揺曳していたのはそのためであった。

なお最後に、序節でも若干言及したが、山里のイメージと草庵風茶室のイメージとの関連について言及しておきたい。即ち、山里のイメージは、山居の趣を再現しようとした草庵風茶室にとっては規範的なイメージの一つで、山里のある種のイメージはそのまま草庵風茶室にも継承されていた。そこで以下では、本稿で明らかにし得た範囲内で、中古の山里のイメージと草庵風茶室のイメージとの共通点、相違点などについて触れておきたい。

まず、山里が人里離れた閑寂な場所で、寂しさ・人恋しさにみだされた場所であるというイメージは、そのまま草庵風茶室のイメージにも受け継がれていた。即ち、中古の山里は、人里離れた閑寂境で、ひとえに人が待たれる場所であったが、それはそのまま閑寂な草庵のうちにあって友を待ち、友の訪れを喜び、一服の茶によって心ばかりの馳走をするという茶の湯の精神と通じ合うものであった。茶席の名称に山里の名を付けるのも⁶⁶⁾、おそらく、そうした中古以来の山里のイメージが継承されていたからであろう。

一方、その他の点では、両者の間にはいまだ大きな懸隔があった。例えば、中古における山里の風景のイメージと草庵風茶室の風景の間には大きな違いがあり、中古における山里の風景を特徴づけていた桜や梅・紅葉といった華やかな美は、草庵風茶室においては厳しく否定されている。利休は冬枯れの木を嫌い（茶譜）、織部も花の咲く木・落葉する木を露地に植えることを禁止している（織部問書）。花や紅葉という華やかな美を配置した中古の山里の、寂しいけれど、どこか優美な印象は、侘び茶の世界には見られないものである。

また中古の山里では眺望が重視されたが、それも草庵

風茶室においては厳しく制限されている。利休が堺の露地で（囲いの入口以外の所では）海の見える露地にわざと木を植え、眺望を隠したことはよく知られているところであるが（怡溪茶書）、「古織部慶長問書」にも、露地から富士山の見えるのを木によって隠したことが伝えられている。中世末期の草庵風茶室においては、広々としてのびやかな開放的眺望より、周囲から隔絶された幽邃な趣の方が好まれたのである。

また、寂しさに対する対し方も、中古における山里と草庵風茶室においては異なっている。即ち、前者においては、寂しさはあくまで美のための条件であって、寂しさそのものに美や価値が見出されたわけではないが、後者においては、「山居閑中ノ草庵ハ、問人ヲモ厭ヒ、離レタル本意ナルニ」（南方録）とあるように、寂しさが寂しさのままに、世を離れた閑居の趣として積極的に求められている。寂しさそのものが美的あるいは思想的に評価されるようになるのは、中世に入ってからで、こうした点でも中古の山里と草庵風茶室の間には、いまだ大きな径庭があり、それが埋められるのは、やはり中世という時代を経過しなければならなかったのである。

さて以上、中古における山里の基本的イメージや美について述べてきたが、山里の美や興趣は勿論本稿で述べたような範囲に限られるものではない。それらは山荘や調度のつくり、山荘生活などにもあったわけで、次稿ではそれらについて述べる予定である。

謝 辞

本稿は草稿の段階で北海道大学の越野 武先生から貴重な助言を頂いた。記して感謝の意を表したい。

注

- 1) 中国における山居の実例と歴史については、大室幹雄：園林都市、三省堂、1985に詳しい。
- 2) 例えば、欲知閑居趣 来尋山水幽 浮沈烟雲外 攀翫野花秋 稻葉負霜落 蟬聲逐吹流 祇為仁智賞 何論朝市遊（「山齋言志」大神朝臣大安麻呂）
- 3) はだすすき尾花逆簪き黒木もち造れるいへは萬代までに（万葉集、巻8、元正天皇）による。
- 4) 懷風藻「五言、初春於左僕射長王宅讌」、「五言、秋日於長王宅宴新羅客」（共に但馬守百濟公和麻呂作）による。
- 5) ここで言うイメージとは、写真とか絵画等の所謂物的イメージ（image physique）ではなく、心的イメージ（image mentale）で、ある対象に対して抱かれる意識の内容全般を指し、形象的イメージだけでなく、印象・感情等の情緒的イメージをも含むものとする。
- 6) 山里のイメージについて考察した類似の研究としては、家永三郎博士の「日本思想史に於ける宗教的自然観の展開」（斎藤書店、昭和22年）がある。しかしこの論考は、主として山里の自然に対する日本人のイメージを扱ったもので、自然が日本人にとっては宗教的救済者にも等しい存在であったことを論じたものである。従って、その主旨は、本稿のそれとは異なるが、文学作品を資料とす

- る方法論や山里の基本的イメージを理解するうえでは、極めて多くの示唆を与えてくれた。
- 7) 奈良朝までの貴族は、両貴族として、京の住居の他に本貫地を有しており、そのため自然に接する機会は多くあったであろうが、平安朝の貴族達は純粋な都市貴族と化し、そのため、失われた田舎や自然の補償を求めて京近郊の山里に山荘を営むことが多くなったのであろう、と考えられる。このことについては、今西祐一郎：山里（『国文学』昭和58年12月号所収）を参照されたい。
 - 8) 目崎徳衛：西行の思想史的研究，吉川弘文館，1978
 - 9) 例えば山科教言邸にあった景総庵など。景総庵については斉藤英俊：桂離宮の建築様式の系譜，（『名宝，日本の美術，桂離宮』岩波書店，昭和57年）を参照されたい。
 - 10) その思想的背景については別稿で考察する予定であるが，禅宗文化の強い影響が窺える。
 - 11) 例えば「山にても憂からん時の隠れ家や都のうちの松の下庵」（『磧礫集』）と詠まれた豊原統秋の山里庵や三条西実隆の角屋など。
 - 12) ジョアン・ロドリゲス：日本教会史（下），会田由他訳，岩波書店，1970
 - 13) 草庵風茶室が我国の山居，特にその山里の思想的系譜を受けつぐものであることは，既に堀口捨己博士の「利休の茶」（『利休の茶の源と流れ』，昭和23年，改訂版昭和53年，鹿兒島研究所出版会）でも指摘され，また家永三郎博士の注6にあげた論考においても，茶室が「外形に於て山里の変形であると云ふにとどまらず，その思想的背景に於ても亦山里の精神の正統的継承者であった」（p.77）と指摘されている。
 - 14) 新編国歌大観，新編国歌大観編集委員会，角川書店
 - 15) 「私家集大成」第1巻【中古Ⅰ】，同第2巻【中古Ⅱ】，和歌史研究会編，明治書院
 - 16) 広辞苑
 - 17) 岩波古語辞典
 - 18) 昔同じ所に宮づかへし侍りける女の，男につきて人の国におちるたりけるを聞きつけて，心ありける人なれば言ひつかはしける—をちこちの人めまれなる山里に家居せんとは思ひきや君（後撰集，1172，読人不知）（数字は国歌大観の歌番号を示す。以下同じ）
 - 19) 田村剛：作庭記，相模書房，1964による。
 - 20) ・かの夕霧の御息所のおはせし山里よりは今すこし入りにて，山にかたかけたる家（源氏物語，手習）
・峰にかたかけて，松原のしたに，さゝやかなる寝殿だつものこそ……（浜松中納言作語）
・山ノ片添ニ山荘ノ様ニ造リタル所有リ（今昔物語，巻27）
 - 21) ・山のかげは小暗き心ちするに，ひぐらし鳴きしきりて（中略）水の音，いと涼しげにて，山おろし心すごく，松のひゞき木深く聞こえわたされなどして（源氏物語，夕霧，一条御息所の小野の山荘）
・秋風肌寒く，山の麓心すごく，鹿の音はるかに聞こえ，御前の草木，或るは色のさかり，或るは花の散りなどしてあはれなるに（宇津保物語，菊の宴・実忠北の方の隠れ住む志賀の山もと）
 - 22) ・そのわたりは比叡，坂本，小野のわたり，音羽川近く，瀧の音，水の声あはれに聞こゆる所なり（宇津保物語，忠こそ，右大臣橘千蔭の隠棲する所）
 - ・錦をしけるやうなる山のかたを，御簾どもまらせて，落ちくる滝の流れも殊なる気色なるを，姫君に御覽せさせ結ぶ（夜の寝覚，広沢の山荘）
 - 23) ・例の，はるかに見やらるゝ谷の軒端より（中略）いと多うもしたる火の，のどかならぬ光を見ると（源氏物語，夢の浮橋，浮舟の隠れ住む小野の山荘からの眺望）
・嵯峨野をやがて御前の庭にて，大井川も程なく見やらるゝに，小倉の山の篠薄，ほのかなる程にもあらず見え渡りて（狭衣物語，嵯峨院からの眺望）
・林泉勝絶素攸聞 斯處眺望被引郡 何郭何城残霧隔 水南水北暮煙分 獨忘帰路立黄嚙（本朝無題詩，東山別業眺望，藤原周光）
 - 24) 今鏡に俊綱が白河院と勝地定めをした時，鳥羽殿は「地形眺望など，いとなき所なり」として，しりぞけられたことが誌されている。景勝性にとって眺望の有無が重要な要素となっていたことがわかる。
 - 25) なお山荘は，例えば源氏物語における大井や宇治の山荘のように，河辺に造られることもあったが，その場合でも「年頃経つる海面におぼえ」たる（薄雲，大井の山荘）とか，「宇治橋のはるばると見渡さるゝ」（浮舟，宇治の山荘）のように，広々とした眺望のきく場所に建てられていたようである。
 - 26) 「囲りを木立ちに覆われて，しかも眺望がきく」という地形は，K・ロレンツの言う「見られないで見る，to see without being seen」という地形と真に同じで，生態学的には最も防衛上有利な地形とされている。しかもアップルトンによれば，そのような地形の風景は，景観的にも最も美しい風景として評価される傾向があるという。JAY APPLETON：The Experience of Landscape，JOHN WILEY & SONS 1975
 - 27) 藤原関雄は葉子の変で上皇方についた真夏の男で，文徳天皇実録によれば「少習属文 性好閑退 常在東山旧居 耽愛林泉 時人呼為東山進士」とあるように，中枢権力から遠ざけられた不遇意識からか，東山に閑居することが長かったようで，その歌も悲歎的な調子が強い。
 - 28) ただし「私家集大成，中古Ⅰ」によれば，柿本集（書陵部蔵501・47）の①「山さとのまきの板戸のをとはやみきみかあたりの霜うへにねん」と柿本人麿集（書陵部蔵501・295）の②「やまのうらにふることくものをもみこゝろふかくてわか恋やます」，及び赤人集（書陵部蔵「三十六人集」510・12）の③「やまさとなきてきつらんほとゝぎすななくことのなきもおもほゆ」には既に「やまさ」との語が見えている。しかしこれらは，それぞれ①は万葉集巻11の2616番の歌（岩波古典文学大系本の番号による。以下同じ。）の後世の改作，②も同じく万葉集巻11の2469番の改作，③も万葉集巻10の1956番の後世の改作と思われる。ただ柿本人丸集（書陵部蔵「歌仙集」511・2）の「山里に月日もおそくうつらんこゝろのとかに紅葉をもみん」は出所不明で，万葉集の歌を後世改作したものというより，その漢詩的内容から想像すると，平安初期の読人不知の歌が人丸集に混入したものであるのではないかと思う。
 - 29) ・春たてど花もにはほぬ山里は物憂かる音に鶯ぞ鳴く（古今集，15，棟梁）
・見る人もなき山里の桜花外の散りなん後ぞ咲かまし（古今集，68，伊勢）

- ・ひぐらしの鳴く山里の夕暮れは風よりほかに訪う人もなし(古今集, 205, 読人不知)
 - ・山里は秋こそことに侘しけれ鹿の鳴く音に目をさましつゝ(古今集, 214, 忠岑)
 - ・山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草もかれぬと思へば(古今集, 315, 宇子)
 - ・白雪の降りて積もれる山里はすむ人さへや思ひ消ゆらん(古今集, 328, 忠岑)
 - ・山里は物の侘びしきことこそあれ世の憂きより住みよかりける(古今集, 944, 読人不知)
- 30) 大凡の分類ではあるが、この種の歌が全体の半数以上を占めている。次いで多いのが、山里の自然美を詠んだもので、山里を住み良き場所と詠んだものは、やや屈折した詠み方ではあるが、注 29 に挙げた古今集・944 番の歌と次の一首に限られる。
- ・住み侘びぬ今は限りと山里につま木こるべき宿求めてむ(後撰集, 1083, 業平)
- 31) ・見る人もなき山里の桜花外の散りなん後ぞ咲かまし(古今集, 68, 伊勢)
- ・をちこちの人目まれなる山里に家居せんとは思ひきや君(後撰集, 1172, 読人不知)
 - ・訪ふ人もあらじと思ひし山里に花のたよりに人目見るかな(拾遺集, 51, 元輔)
 - ・あと絶えて来る人もなき山里に我のみ見よと咲ける卯の花(後拾遺集, 171, 通宗)
 - ・すむ人もなき山里の秋の夜は月の光もさびしかりけり(後拾遺集, 258, 範永)
 - ・訪ふ人も暮るれば帰る山里にもろともにすむ秋の夜の月(後拾遺集, 259, 素意法師)
 - ・我一人ながむと思ひし山里に思ふことなき月もすみけり(後拾遺集, 834, 為時)
 - ・思ひやれ訪ふ人もなき山里の笈の水の心細さを(後拾遺集, 1040, 上東門院中将)
 - ・寂しさに家出しぬべき山里を今宵の月に思ひとまりぬ(詞華集, 296, 道濟)
- 32) ・白雪のふりて積もれる山里はすむ人さへや思い消ゆらん(古今集, 328, 忠岑)
- ・鶯の声なかりせば雪消えぬ山里いかで春を知らまし(拾遺集, 10, 朝忠)
 - ・雪降りて道踏みまどふ山里にいかにしてかは春の来つらん(後拾遺集, 7, 兼盛)
 - ・降り積もる雪消え難き山里に春を知らする鶯の声(後拾遺集, 21, 読人不知)
 - ・春立てど花もにはほはぬ山里は物憂かる音に鶯ぞ鳴く(古今集, 15, 棟梁)
- 33) ・春はまづ霞にまがふ山里をたちよりて訪ふ人のなきかな(後拾遺集, 40, 選子内親王)
- ・思ひやれ霞こめたる山里に花まつほどの春のつれづれ(後拾遺集, 66, 上東門院中将)
- 34) ・ひぐらしの鳴く山里の夕暮れは風よりほかに訪う人もなし(古今集, 205, 読人不知)
- ・なにしか人は来てみむいとどしく物思ひまさる秋の山里(後拾遺集, 334, 和泉式部)
- 35) ・山里は雪の下水こほりつゝ春とも知らぬけしきなるかな(範永朝臣集, 範永)
- ・年はこえ春はまだ来ぬ山里のその徒然を思ひやれ君(道命阿闍利集, 道命)
- 36) ・とふ人もあらじと思ふ山里に花のたよりにひとめ見るかな(元輔集, 元輔)
- ・知る人もなき山里の梅花にほふによりぞ来てもたづぬる(西本願寺蔵「三十六人集」中の「もとさね」, 元真)
- 37) ・春はまづ霞にまがふ山里をたちよりてとふ人のなきかな(後拾遺集, 40, 選子内親王)
- ・思ひやれ霞にこめたる山里に花まつほどの春の徒然(後拾遺集, 66, 上東門院中将)
- 38) ・をりにくと人や告げけん山里に残らず花は散りにけるかな(道命阿闍利集, 道命)・山里に散りはてぬべき花ゆえに誰とはなくて人ぞ待たるゝ(後拾遺集, 135, 道濟)
- 39) ・花の色を惜しむのみかは山里はいつかはひと目またも見るべき(林葉和歌集, 俊恵)
- ・花も散り鶯の音もかれゆけば我山里はあくがれぬべし(西本願寺蔵「三十六人集」中の「しけゆき」, 重之)
- 40) ・卯の花に咲きこめられて山里に恋し都も忘れにけり(道濟集, 道濟)
- ・郭公なく山里の垣根をばかきたえずこそとふべかりけれ(家経朝臣集, 家経)
- 41) ・山里に住むしるしなし郭公まれに来んとは思はざりしを(躬恒集, 躬恒)
- ・山里のかひこそなけれ郭公みやこの人もかくや待つらん(詞華集, 58, 道命)
- 42) ・なにしか人は来てみむいとどしく物思ひまさる秋の山里(後拾遺集, 334, 和泉式部)
- ・を鹿ふす茂みにはへる葛の葉のうら寂しげに見ゆる山里(後拾遺集, 1151, 能宣)
- 43) ・山里はみぎはの菊の咲く時ぞをとなき人のかげも見えける(家経朝臣集, 家経)
- ・くるゝ秋を惜しみに来つる山里の紅葉の色はかぎりなきかな(四条中納言集, 定頼)
- 44) ・嵐のみ吹く山里の紅葉を霧立ちこめて来る人のなさ(道濟集, 道濟)
- ・散ちらす見る人もなき山里の紅葉は闇の錦なりけり(和泉式部集, 和泉式部)
- 45) ・鹿の音にいとゞわりなきまさりけり山里にこそ秋はすませめ(増基法師集, 増基)
- ・とふ人も暮るれば帰る山里にもろともにすむ秋の夜の月(後拾遺集, 259, 素意法師)
- 46) ・山里はまだ長月の空ながら霰時雨の降るにぞありける(能因集, 能因)
- ・山里は道もや見えずなりぬらん紅葉と共に雪の降りぬる(家経朝臣集, 家経)
- 47) ・山里は冬ぞ寂しさまさりける人めも草もかれぬと思へば(古今集, 315, 宇子)
- ・道もなく雪降りにけり山里はたゞ山びこのこたへのみして(道濟集, 道濟)
- 48) ・はし鷹を手ひきすえて山里の宿かりにこそけふは来にけれ(西本願寺蔵「三十六人集」中の「よしのふ」能宣)
- ・山里に心あはする人やあると我はし鷹にかわりてぞとふ(順集, 順)
- 48) ・雪のうちに今日も暮らしつ山里はつま木の煙心細くて(基俊集, 基俊)
- ・冬ごもり人もかよはぬ山里のまれの細道ふたぐ雪かも(加茂保憲女集, 保憲女)

- 50) ・春や来る人やとふとも待たれけり今朝山里の雪をながめて (後拾遺集, 410, 赤染衛門)
 ・山里の柴の扉の雪閉じて年のあくるもしらずやあるらん (肥後集, 肥後)
- 51) なお、これらの風景を再現するに際しては、各景物がどのような文脈で、どのような意味をもって詠まれているかを明らかにしておく必要があるが、ここに挙げられた景物は、その風景が類型的であると同様に、その殆どが平安時代の和歌の類型的修辞法の範囲内で詠まれており、ここでは逐一その文脈、意味、例歌などを示すことは省略した。
- 52) ・山里に荒れたるやどを照らしつゝ幾夜経ぬらん秋の月かけ (小町集, 小町)
 ・をのづから秋 (飽き, 筆者注) は来にけり山里の葛這ひかゝる模の伏屋に (大納言経信卿集, 経信)
- 53) 大原野にまうで侍, 山里のかすかなるに、貴びたる人の、そこに住むべきにもあらぬが、はべりしかば、いつこよりのものしたる人ぞなど、とはせはべりしかば、かくませり一世の中をそむきとは来しかどもなほ憂きことは大原の山 (西本願寺蔵「三十六人集」のうち「よしのぶ」集, 能宣)
- 54) ちなみに「上代倭絵年表」(改定版, 家永三郎著, 墨水書房, 1966)によれば、中古の倭絵で最も多く描かれたモチーフは、山里でひとり孤独な侘び住まいをする女性を描いたものである。即ち、この年表にあげられた倭絵の殆どは障屏・扇面画で、歌が付されており、その詞書によって画題とその大凡の構図を知ることができるのであるが、今、その詞書中に「山里、やまさ」との語があり、明らかに山里の情景を描いていたと思われる場面を抽出すると46の場面があり、そのうち女性がひとり山里に住む情景を描いたものは10例で、最も多く描かれたモチーフであった。次いで多いのが、その山里で侘び住まいをする女性を男客人が訪問し、消息をかわすという場面で、7例あった。
- 55) 注6)の文献参照
- 56) 西村 亨: 王朝恋詞の研究, 慶応義塾大学言語文化研究所, 1972
- 57) 例えば「夜の寝覚物語」では広沢が、「かかる世離れたる所には、空飛ぶ鳥の一声をだに命にかくることなりければ」(巻2)のように言われている。
- 58) ・世の中の世のなかならば夏草の茂き山辺も尋ねざらまし (蜻蛉日記)
- 59) ・としも老い、病も重くなりぬれば、静かならん山里たづね歩きて詠める—今はとて露の住みかを尋ぬるや憂きを離るゝかどでなるらん (前参議教長卿集, 教長)
 ・病の間、山里にて詠める。暮天郭公—いとどいとど入相の鐘のかなしきに死出の田長の声聞こゆなり (江師集, 匡房)
- 60) 夜、呼子鳥を聞きて—あたとえて人も通はぬ山里になに夜もすがら呼子鳥ぞも (源賢法眼集, 源賢)
- 61) なお山里は服喪の場所ともなっていて、これもまた親しい友人や京から隔離された寂しい生活を強いるものであった。
 年頃住み侍りける女の、身まかりける四十九日はてゝ、なほ山里にこもりゐて詠み侍りける—誰も皆花の都に散りはてゝひとり時雨る秋の山里 (左京大夫頼輔卿集, 頼輔)
- 62) 発心集には「罪なくして罪をかうぶりて、配所の月を見ばや」とある。
- 63) 例えば3節の2で挙げた倭絵の3場面は、共に障屏画中の場面である。
- 64) 例えば落窪物語の中で「十二月、山に雪いと高く降れる家に、女ながめてゐたり」という画題(詞書)で「雪深く積もりて後は山里にふりはへて来る人のなきかな」という歌の詠まれた屏風絵は、実は、女主人公の父の七十賀の屏風絵として描かれたものであった。
- 65) 中世における山里の美については別稿で述べる予定であるが、例えば中世になると初めて、山里の寂しさの美が認識されるようになり、その寂しさの中に配置されるものも、一層寂しさ・侘しさをそそるものが選ばれるようになる。
- 66) 例えば秀吉の大阪城や名護屋城につくられた「山里丸」「山里の座敷」など。

SYNOPSIS

UDC : 72.01 : 721 : 398

ON THE FOUNDMENTAL IMAGE AND BEAUTY OF "YAMASATO" IN THE HEIAN PERIOD LITERATURE

Study on the ideas of "Sankyo" through the Japanese Literature. Part 1

by **KYOHEI ONO**, Associate Prof. of Hokkai Gakuen
University, Member of A. I. J.

"Yamasato" is the place where the many villas of Aristocrats in Heian period were built. And it had been recognized as an aesthetical world.

Then, in this paper, I tried to make clear it's beauty and foundmental image through the Heian Period Literature.

Contents are as follows ;

1. Preface
2. Geographical image of Yamasato
3. Foundamental image of Yamasato
- 3-1 Loneliness of Yamasato
- 3-2 Image of season and landscape of Yamasato
4. Loneliness and Beauty of Yamasato
5. Conclusion